

大学学部留学生のための専門日本語学習支援 ——日本語教師による困難語予測に焦点を当てて——

小竹 直子

はじめに

外国人留学生が日本の大学で専門的な学びを修めようとするとき、彼らは多くの場合、自分の専門分野の論文や書籍を日本語で読んで理解する必要がある。ところが日本語教師は、留学生の専門分野について必ずしも専門家ではなく、各分野の専門語を指導するには限界があることが指摘されている。そこで、留学生自身が専門日本語を自主学習するための教材提供をすることに重点が置かれるようになり、特定の分野に高頻度で現れる専門語を計量的に特定し、リスト化する試みがなされてきた。しかし、専門日本語の文章読解において問題となるのは必ずしも専門語だけではなく、一般語が問題となる場合も多い。小竹（2022）で行った調査で、留学生が専門科目の教科書を読む際に理解の妨げとなるのは、日本語母語話者なら常識的に知っている一般語である場合があることが示唆された。すなわち、日本語教師と大学の学部に所属する留学生に、ある専門科目のテキストの一部に含まれている語の中から未知の度合いを7段階で評価してもらい調査を行った。その結果、留学生は日本人なら一般常識的に知っている語を未知語と評価し、それらの語の理解不足や誤解によって文章理解につまずいていることがわかった。また、日本語教師の評定値と留学生の評定値が高い割合で一致していたことから、日本語教師は留学生にとっての困難語を高い確率で予測できることがわ

かった。この結果を受けて筆者は、留学生が一般語の意味理解の不足から専門的な文章の読解に失敗してしまうのを防ぐうえで、日本語教師が果たせる役割は大きいと主張した。ただし、先述の調査においては、日本語教師の選定基準に「指導が必要な語と認めるか否か」という別の基準が介在していたため、純粋に留学生にとって理解が難しい語を日本語教師が予測できることを実証できていなかった。そこで本稿では、日本語教師による困難語の予測可能性を実証することを目的として留学生と日本語教師、そして日本語教授経験のない日本語母語話者の三者の困難度評価の比較を行う。

第一章 専門日本語語彙指導と日本語教師の役割に関する先行研究

本章では本稿の前提となる先行研究の議論について整理し、本稿の理論的・教育的意義を精緻化したい。すなわち、本稿では専門日本語における文章読解を支援するために語彙指導が必要であるという前提のもとに、その語彙指導において日本語教師が担うべき役割があることを検証しようとしている。そこでまず、文章読解を支援するために語彙指導が有効であることを示す先行研究を概観しておきたい。そして、語彙指導において日本語教師と一般の専門の教員との間に違いがあると考ええる根拠を先行研究の議論から導く。そのうえで、本稿の目的とする日本語教師による理解困難語の予測可能性を探ることの意義を確認し、本稿の調査が専門日本語教育においてどのような意味を持つのかを示したい。

1-1. 文章理解を促す語彙指導について

第二言語における語彙知識が文章理解を促進すること、あるいは語彙知識の不足が文章理解を妨げることは、英語学習者を対象とした実証研究(Hirsh & Nation 1992, Carver 1994, Hu & Nation 2000、他)においては古くから認められている。日本語学習者を対象とした研究においても、小森・三國・近藤(2004)で文章中の既知語数が多ければ多いほど文章理解が促され

ることが確認されている。また、知っている語の数という量的側面だけでなく、語彙知識の深さ、すなわち類語をどのくらい知っているかや、文中で一緒に使われやすい語を知っているか、などの知識がどれだけあるかが文章理解に影響を及ぼすことも、藤山（2013）で実証されている。また同時に理論的研究においても、語彙知識がなぜ文章理解を促進するのかについて、Anderson & Freebody（1981）が「適性仮説」「道具仮説」「知識仮説」という三つの仮説によって説明している。「適性仮説」とは、語彙テストの結果と文章理解テストの結果の両方に知能の高さが影響しているという説である。「道具仮説」とは語の意味の理解は文章理解の出発点であり、語を知ることが文章理解を可能にするという説である。「知識仮説」では語の知識が文章理解を促すのは、ある語を知っているということがその語に関わる一連の知識を所有していることを反映しているからだという考え方である。塚田（1995）では、単独の語の知識を享受することが必ずしも文章理解をストレータに促すわけではないと述べ、これまでの語学教育は「道具仮説」を依拠しすぎであり、「知識仮説」にもっと力点を移すべきだと主張している。弥永（2013）では、読解前に語彙指導を行う効果は、語の定義だけでなく、その語が使われる文脈を提示したり、複数回その語を提示したりした場合のみ高い効果があると述べている。以上のような先行研究から本稿は、専門日本語においても文章理解を促す語彙指導は必要であるという立場に立つ。そのうえで、読解に先立って語彙指導をするために指導語彙を特定する必要がある、その語彙の特定に日本語教師の経験が役立つことを実証したい。留学生にとって指導が必要な語は必ずしも専門語ではなく、その分野の論文で出現頻度が高い語を抽出するという方法では特定できない。専門語かどうかの区別よりも、文章中に出現する語の中から留学生にとっての未知語を特定することが重要であり、その作業は日本語教師が担うべき役割だと主張したい。その分野の専門家ではない日本語教師であっても留学生にとって難しい語を特定することは十分に可能であり、むしろ日本語教授経験のない母語話者よりも日本語教師のほうがよりよく特定できるのではないかと考えて

いる。次節では、本稿がそう考える根拠として、母語話者が非母語話者とコミュニケーションをするために言語を調節する行動とその行動に非母語話者との接触経験が影響することを示す先行研究を概観しておきたい。

1-2. 日本語教師が学習者の理解困難語を予測できる理由について

本稿は、留学生の専門分野において必ずしも専門家ではない日本語教師が専門日本語の語彙指導を担えるのか、あるいは担うべきなのかという疑問を出発点としている。そのような疑問は、その分野の専門家である大学教員でなくても日本語教師が指導できる範囲は何なのかという問いに言い換えられる。この場合に専門家と日本語教師の間に違いがあると考えられる根拠として、母語話者は非母語話者との接触場面で意図的に言語をコントロールすることを示す研究を見ておきたい。すなわち、非日本語母語話者である留学生との接触機会の多い日本語教師は、留学生の理解可能な範囲を推測しながら言語をコントロールすることに長けており、一般の母語話者よりも非母語話者が理解可能かどうかに関心であることが予想されるのである。

母語話者は非母語話者とコミュニケーションをする場合に非母語話者の理解を可能にするために簡略化した言語使用域、すなわち「フォーリナー・トーク」を使用する傾向があることが指摘されている (Ferguson, 1981)。日本語のフォーリナー・トーク研究においても、日本語母語話者が日本語を母語としない外国人と会話による交流をする場合に、情意面、言語面で意識的に調整行動を行うことが明らかにされている (一二三 1995、村上 1997)。また、非母語話者との接触経験の多寡が母語話者の調整行動に影響を与えることも指摘されている。一二三 (1995) では、経験の長い日本語ボランティアほど外国人との会話において、語彙や文法、スピードなどの言語の調節を重視することをアンケート調査によって明らかにしている。村上 (1997) では、非母語話者と接触経験の多い母語話者は非母語話者との会話において「精緻化」「確認チェック」「明確化要求」などの調整行動を積極的に行うことを実験的に証明している。筒井 (2008) では、日本語教師やホストファミ

リーなど非母語話者との接触経験が多い母語話者ほど非母語話者への情報伝達において例示を用いて非母語話者の理解を促す工夫を行うことを報告している。これらの先行研究から、留学生との接触機会が多い日本語教師は留学生の理解度に意識的であり、理解を促すための言語的調節を積極的に行う傾向があると考えられる。そして、留学生の理解度に合わせて調節するために、留学生が理解できる語彙であるかどうか意識的である傾向が強いと考えられる。このことから、本稿では日本語教師は留学生が、ある専門的な文章を読もうとする際にどのような語彙が未知であるのか、あるいは理解が難しいのかを判断する能力に長けているのではないかと予想した。ただし、村上（1997）や榊田（2015）、張（2022）でも指摘されているが、非母語話者の理解度に配慮した言語の調節は日本語教育の知識や日本語教授経験がない母語話者であっても非母語話者との接触経験が多ければ意識的に行うようになるのであり、日本語教師だからできることであるとは言えない。したがって、上述の先行研究で見られた調整行動の違いが単純に一般の大学教員と日本語教師の違いとは捉えられず、困難語の予測においても日本語教師の方が常に優位であるとは結論付けられない。ただ、小竹（2022）の調査で留学生と日本語教師の未知語の判定結果が高い一致度であったことは、留学生との接触経験が多い日本語教師が学習者が理解できない語彙に意識的であることを反映していると見ることができる。また、留学生にとって難しい語を特定した後、その語を適切に指導できるかという点で日本語教育の知識がどこまで有効であるかは別の議論を要する。本稿ではそこまでの議論には立ち入らない。次節以降で述べる調査によって、日本語教師が日本語教授経験のない母語話者に比べて困難語を高い確率で予測できることが確かめられれば、専門的な文章読解を日本語教師が支援する意義を示す一歩となると考える。そして、専門日本語における日本語教師の支援可能な範囲が狭く見積もられすぎることへ警鐘を鳴らすことができよう。

第二章 留学生の専門日本語の読解と困難語に関する先行研究

ここでは、専門日本語の語彙指導における日本語教師の役割を探るために、先行研究の議論を基に論点を整理していきたい。本稿は、留学生が専門的な文章を日本語で読む場合に、その分野の専門語が問題にならないと主張したいわけではない。また専門語の指導についてはその分野の専門家に任せるべきであるという点には賛同する。ただ、そうであっても日本語教師の出番がなくなるわけではないと考えている。その理由は、野田（2014）で指摘されているように語彙の意味が理解できても文章構造を不適切に捉えてしまう可能性があることが一つ、また加藤（2017）が外国人看護師候補者の看護師試験の誤答原因を分析して述べているように、専門的知識だけでなく日本の文化的・習慣的な知識の不足が文章理解の妨げになるという点が挙げられる。

それに加えて、本稿では日本語教師の困難語予測の有効性を挙げたい。先述のように小竹（2022）では、日本語教師はあるテキストの中から学習者にとって難しい語を見つけることができると主張した。具体的な調査は以下の通りである。すなわち、ある専門科目のテキストの一部を日本語教師と留学生に読ませ、その文章中に現れる語のうち日本語能力試験の級外の38語について日本語教師には指導が必要だと考えるかどうか、留学生には意味を知っているか知らないか、あるいは推測が難しいかどうかを7段階で評価してもらった。その結果、留学生の評定値が低い語、すなわち難しいと評価した語の63.2%が、日本語教師が指導の必要性を評定した値と誤差2.9以内であった。また、留学生の評定値が高い語、すなわち難しくないと評価した語であっても、文章理解課題で正しく解釈していないケースが見られたことから、留学生は語の理解について楽観的に評価する傾向があるのではないかと考察した。以上の結果を受けて、本稿では留学生が日本語で書かれた専門的な文章を読解する際に理解のつまずきとなる語を日本語教師は的確に予測し特定できると主張したい。

しかし、上述の検証方法については、以下の点で問題が残されている。第一に、日本語教師の評定尺度を「指導が必要かどうか」としたことが留学生の評定値とのずれに繋がった可能性があることである。留学生が知らない語だろうと予測していても、汎用性が低い語であれば指導の必要がないと判断する可能性がある。第二に、日本語教授経験のない母語話者との比較検証が行われていないことである。すなわち、日本語教授経験のない母語話者に比べて日本語教師はより高い確率で留学生の困難語を予測できると言えるのか明らかではない。前節で既に見たように、日本語のフォーリナー・トーク研究において、外国人との接触経験がある母語話者は外国人とコミュニケーションする場合に相手の理解可能な範囲の言語を積極的に使おうとする傾向があることがわかっている。日本語教師は日本語指導の際、留学生が理解できる語かどうかを意識的になっているはずであるから、その経験の蓄積から留学生が理解できる語とそうでない語を予測する力が養われるのではないかと考えられる。この点が確認されれば、日本語教師は一般の母語話者に比べて留学生の困難語をより的確に特定し、より効率よく指導することができると主張する根拠が得られる。以上の問題点を踏まえて本稿では、日本語教師の評定尺度を「留学生にとっての理解困難度」とした上で再度調査し、調査結果を日本語教授経験の有無によって比較してみたい。

留学生にとっての困難語が専門語に限らないことについては先行研究の主張を踏襲して本稿では改めて検証しない。専門科目のテキストの中で留学生が難しいと感じる語が母語話者にとっては当たり前理解している語であることが多いことは、先行する調査において示唆されている。小竹（2022）の調査で用いた候補語を留学生の評定値のレベルで分けみると、表1のようになる。留学生の評定値が低いほど難しいと評価した語ということになる。これを見ると、「ヴィトン」「極道」「スタンス」「夏目漱石」など大学生くらいの年齢の日本語母語話者なら通常知っていると考えられる語が多い¹⁾。少なくともこのテキストのテーマである「社会学」に特化した語ではない。また、「夏目漱石」のような人名を知っているかどうかは日本文化の知識を反

映していると考えられるため、加藤（2017）が指摘していることと合致する。

表1：留学生の評定値による候補語の分類

留学生の評定値	候補語
1.0～2.9	剥奪、せがむ、
3.0～3.9	ご託宣、滅入る、ヴィトン、極道、スタンス、後天的、安らぎ、おしはかる、夏目漱石
4.0～4.9	ガックリ（くる）、カモ、準拠集団、暗転する、論調、（金銭を）スラれる
5.0～5.9	変種、おちいる、習性、皇族
6.0～6.9	ムカつく、属性、無意識、後方、前方、欲求、お隣、マネ、こいつ、マス・メディア、美容師
7.0	ライフスタイル、アイドル、近隣、同級生、不満足、オリジナル

これらの調査を待たずとも日本語を母語とする学生と非母語話者である留学生とで理解につまずく語が違うことは自明のことと言えるかもしれない。また、日本社会や日本文化に関する知識の差が困難語の種類に影響することも当然であろう。大学入学前に留学生が受けてきた一般の日本語教育でそれらを全てカバーするのは現実的ではなく、留学生は大学に入ってから専門的な語を学習すると同時に日本社会における一般常識的な語の学習も進めていかなければならない。大学学部レベルの専門日本語教育の役割はそこにあると本稿では考える。すなわち、留学生が日本語で専門的な文章を読む力を身に付けるためには、専門語と同時に学習者にとって未知の一般語を指導していくことが必要な支援であり、日本語教師が担うべき役割だと本稿では主張したい。その主張の根拠として、一般語の指導が必要であるという点については先行研究で既に指摘されているため、日本語教師が留学生にとっての未知語を特定できるかどうかという点について本稿では検証を行う。

第三章 留学生にとっての困難語と日本語教師の予測に関する調査

ここまで、留学生が専門的な文章を日本語で読むために必要な語彙を学習するうえで日本語教師ができる支援は何か、その支援を日本語教師が担うべき理由は何か、という疑問が本稿の研究動機となっていることを述べてきた。

本章ではそれらの疑問に対する答えを提案するために筆者が行った具体的な調査の概要と調査結果について報告する。

3-1. 調査の目的

専門日本語語彙指導における日本語教師の役割を探るうえで留学生が専門日本語学習において獲得する必要がある語彙知識はいわゆるその分野の専門用語だけではないことと、専門用語以外の留学生にとって難しい語を見つける力が日本語教師にあるという点が重要になる。専門用語の専門的な語義の説明は専門家に任せるべきことは当然であり、また一般の日本語教育で扱われる語の学習だけでは大学での専門的な学びに不十分であることもまた経験的に確認されている。そこで必要となる調査は、まずは大学の専門科目で用いられるテキストの読解において、留学生が難しいと感じる語はどのような語かを調べることである。次に、日本語教師が留学生が難しいと感じるであろう語をどう予測するかを調査する。そして、日本語教授経験のない母語話者にも同様に予測してもらい、日本語教師の結果とどちらが留学生の結果との一致度が高いか比較する。それらの結果から日本語教師が日本語教授経験のない母語話者よりも留学生にとって難しい語を見つけやすいことが証明できる。そのうえで、留学生にとっての困難語がその分野の専門語だけでないとするれば、専門語以外の語については日本語教師が先回りして指導することによって専門的な内容の読解を助けることができると推察できる。以上をまとめると、本調査は以下の2点を明らかにすることを目的とする。すなわち、

- ① 日本語教授経験がある母語話者は留学生にとって難しい語を予測できるか

② その予測確率は日本語教授経験のない母語話者よりも高いか
という2点である。

3-2. 調査の方法

調査方法は小竹（2022）で報告した先行調査の方法を踏襲しつつ、一部改良を加えた。以下で（1）調査に使用したテキスト、（2）調査手順、（3）語彙候補と判定基準、（4）文章理解課題について報告する。

（1）調査に使用したテキスト

先行調査で留学生が大学の専門科目のテキストを読解する上で問題となる語は専門語だけではないことが示されたが、その調査に用いたテキストは学部1年生対象の科目のものであり、専門書としては入り口に当たるものであった。また、「社会学入門」という科目のテキストで、日本社会の身近な例を用いて社会学の概念を説明する文章であったため、日本で長く生活している人にとってわかりやすいが留学生にとっては身近ではない語が多く含まれていたことが結果に影響した可能性が否定できない。そこで今回は、国際関係学部多文化コミュニケーション学科の2年生対象の必修選択科目である「観光文化総論」のテキスト『多文化時代の観光学—フィールドワークからのアプローチ』（高山陽子編著、2017年、ミネルヴァ書房）を採用し、その3頁から6頁に掲載されている「イギリスの産業革命と観光業」をテーマにした文章を調査文に用いることとした。このテーマであれば、日本社会や日本文化に関する知識に依存せずに文章理解が可能だと考えられるからである。また、新たな専門的な概念の導入よりも産業革命が社会に与えた影響という事実認識の形成を目的とした文章であることから、文章理解の程度を客観的に測定しやすいと考えられる。

（2）調査の手順

調査の手順については先行調査に倣って次のように設定した。

《調査1》留学生による文章読解と未知語の特定調査

留学生に調査文（巻末資料①）を読んで、2つの文章理解課題（巻末資料

②、③)に取り組んでもらう²⁾。そして、予め用意した語彙候補(表2)に対して未知の度合いや意味の推測可能性を次のような基準で7段階評価してもらう。

- 1・・・知らない言葉で意味の推測もできず、まったく意味がわからない
- 2・・・知らない言葉で、意味は少し想像できるが、自信がない
- 3・・・知らない言葉で、意味はおおよそ推測できるが、正しいかどうか自信がない
- 4・・・知っている言葉だが、意味を完全に理解しているか、自信がない
- 5・・・知っている言葉だし、意味を容易に推測することができる
- 6・・・よく知っている言葉で意味を完全にわかっていると思う
- 7・・・よく知っている言葉で、意味の理解はまったく問題ない

最後に、文章理解課題についての感想や、大学での専門科目の学習において困難に感じている点などについて質問に答えてもらう。

《調査2》日本語母語話者による語の難易度判定調査

日本語母語話者に所定の文章(巻末資料①)を読んで、2つの文章理解課題(巻末資料②、③)に取り組んでもらう。そして、予め用意した候補語(表2)に対して留学生にとっての未知の度合いや意味の推測可能性を次のような基準で7段階評価してもらう。

- 1・・・知らない語で意味の推測もできず、まったく意味がわからない
- 2・・・知らない語で、意味は少し想像できるが、完全にはわからない
- 3・・・知らない語で、意味はおおよそ推測できるが、完全に正しいとは限らない
- 4・・・知らない語だが、文脈の助けを借りて、容易に意味を推測可能である
- 5・・・知っている語であり、文章理解の問題にならない程度に意味をわかっている
- 6・・・よく知っている語で、文章中の意味を理解できる
- 7・・・よく知っている語で、意味を完全に理解していて、まったく問題がない

日本語母語話者には判断の材料として、以下のように留学生の日本語能力レベルや母語、候補語や判定条件などについての情報を示した。

- a. 留学生は日本語能力試験 N1 に全員合格している
- b. 留学生の国籍・母語はバラバラである
- c. 留学生は予習をしておらず、初見である
- d. 候補語はすべて旧日本語能力試験 1 級あるいは級外の語である
- e. すべての漢字にフリガナが振られている

なお、本調査は Google Forms で作成した Web 上のアンケートフォームを使った質問紙調査で、調査協力者に対して時間制限を設けずに回答してもらった。

(3) 候補語の選定方法

調査 1 と調査 2 で評定の対象とする候補語は、次の手順で選定した。すなわち、調査文を日本語読解学習支援システム『リーディング・チュウ太』³⁾ につけ、旧日本語能力試験 1 級レベル及びに級外の語を抽出した。その中から地名や一般に知られていない人名、「サウスコースト」など英語からの類推が容易であるもの、漢字表記から類推が容易であるものを除いて、品詞や語種のバランスを考慮した 40 語に絞った。

以下に、候補語を表 2 として示す。

表 2：候補語

1. 革新（かくしん）	21. 幾度（いくど）
2. 賃金（ちんぎん）	22. 鉄道網（てつどうもう）
3. 奴隷（どれい）	23. 乱立する（らんりつする）
4. 巨額（きょがく）	24. 運賃（うんちん）
5. 富（とみ）	25. まなざし
6. 綿織物（めんおりもの）	26. 繁栄（はんえい）
7. 飛び杼（とびひ）	27. 衰退（すいたい）
8. 紡績（ぼうせき）	28. 日光浴（にっこうよく）

9. 初頭（しょとう）	29. しのぐ
10. 膨れ上がる（ふくれあがる）	30. 栈橋（さんばし）
11. 排煙（はいえん）	31. 遊歩道（ゆうぽどう）
12. 垂れ流し（たれながし）	32. 皮切り（かわきり）
13. 疫病（えきびょう）	33. ターミナル駅（ターミナルえき）
14. 上下水道（じょうげすいどう）	34. プラットホーム
15. スモッグ	35. 並行する（へいこうする）
16. 劣悪（れつあく）	36. 構内（こうない）
17. 肺結核（はいけっかく）	37. アガサ・クリスティ
18. 過酷（かこく）	38. 密室（みっしつ）
19. 制約する（せいやくする）	39. 名残（なごり）
20. 出生登録（しゅっせいとうろく）	40. 設ける（もうける）

3-3. 調査協力者

今回の調査に協力していただいた協力者は以下のとおりである。

《調査1》留学生による文章読解と未知語の特定調査

調査1の協力者は、亜細亜大学に所属する外国人留学生13名である。全員、日本語能力試験N2合格以上（N2合格者10名、N1合格者3名）の日本語力を有しており、調査文として用いたテキストを読んだことがなく、当該科目も履修したことがないことを確認している。学部所属の留学生10名に留学生別科の所属の留学生3名が含まれている。留学生別科の留学生は学部入学前であって本研究の目的からすると本来対象外であるが、N2レベル以上の高い日本語能力が認められたため含めることとした。学部所属留学生の所属学部は、国際関係学部5名、経営学部4名、都市創造学部2名であった。国籍は、ベトナムが9名、マレーシア2名（いずれも母語は中国語）、フィリピン1名、中国1名であった。

《調査2》日本語母語話者による語の難易度判定調査

調査2の協力者は、日本語教授経験のある母語話者19名、日本語教授経験のない母語話者6名の合計25名である。日本語教授経験のある母語話者

の経験年数は最も長い人で33年、最も短い人で2年6か月であった⁴⁾。日本語教授経験のない母語話者の協力がなかなか得られず人数に不均衡があったため、経験の有無による二分割ではなく、経験年数によって段階的に比較することとした。日本語教授経験の年数が20年以上（最も長い人で33年、最も短い人で20年）の母語話者が10名、教授経験が20年以下（最も長い人で16年5か月、最も短い人で2年6か月）の母語話者が9名、教授経験がない母語話者が6名であった。この3つのグループを経験年数の長い順に母語話者A、母語話者B、母語話者Cと呼ぶこととする。

3-4. 調査実施時期

調査1、2ともに、2021年12月26日から2022年2月4日までの間に協力者からの回答を収集した。

3-5. 調査の結果

以上で述べた方法に基づいて調査を行った結果を報告する。

まず、評定の対象とした候補語40語それぞれについて、留学生の評定値と日本語教授経験の年数によって分類した3つのグループの母語話者の評定値を表3に示す。

表3: 留学生と母語話者の評定値

	留学生	母語話者 A 20 年以上の 経験あり	母語話者 B 20 年未満の 経験あり	母語話者 C 教授経験なし
革新	6.2	4.9	3.6	3.3
賃金	6.0	6.1	5.1	5.7
奴隷	4.8	4.3	2.6	3.7
巨額	5.2	4.7	3.8	4.2
富	5.7	5.2	3.8	5.0
綿織物	4.8	4.4	3.6	3.5

飛び杼	2.7	1.9	1.3	2.0
紡績	2.7	2.9	1.8	2.5
初頭	5.3	4.8	4.0	3.8
膨れ上がる	4.4	5.0	3.8	4.5
排煙	5.6	4.5	3.9	3.2
垂れ流し	3.9	3.3	3.1	3.7
疫病	4.9	4.0	3.0	4.3
上下水道	5.0	5.3	4.0	4.8
スモッグ	5.8	4.3	3.2	3.8
劣悪	4.5	4.5	3.6	4.2
肺結核	3.4	2.9	2.9	2.8
過酷	4.4	4.8	2.9	3.5
制約する	5.8	5.2	3.2	3.2
出生登録	5.5	4.9	4.1	3.7
幾度	4.8	5.0	3.4	4.2
鉄道網	5.1	5.0	4.3	4.5
乱立する	4.4	4.5	3.2	3.2
運賃	6.2	6.7	5.9	5.7
まなごし	3.0	3.1	2.2	3.5
繁栄	6.2	5.8	3.8	3.7
衰退	6.5	5.6	3.8	3.7
日光浴	5.8	5.7	4.3	4.0
しのぐ	3.0	2.6	2.2	2.8
栈橋	2.8	3.3	2.8	3.3
遊歩道	4.6	4.1	3.7	3.8
皮切り	4.0	3.4	2.9	2.3
ターミナル駅	6.1	4.0	4.4	5.3
プラットホーム	5.8	5.4	4.7	6.2
並行する	5.2	5.5	3.9	3.7
構内	4.6	5.6	4.3	3.7
アガサ・クリスティ	2.2	3.6	3.9	5.7
密室	5.5	5.0	3.7	4.2
名残	3.5	3.9	2.6	3.0
設ける	6.5	6.2	4.8	3.7

表3を見ると、日本語母語話者の3つのグループの間で評定値1以上の違いが生じている語が多く見受けられる。各語の評定値で最も低い評定値と最も高い評定値の差が1以上になる語は40語中30語であった。このことから日本語教授経験の有無によって、あるいは経験年数によって母語話者の評定値が影響を受けることがわかる。

また、留学生の評定値と母語話者の評定値との差を平均すると、3つのグループで表4に示すような違いが見られた。

表4：日本語教授経験による評定値の差

	日本語教授経験	留学生の評定値との差
母語話者 A	20 年～33 年	0.6
母語話者 B	2 年 6 か月～16 年 5 か月	1.4
母語話者 C	0 年 0 か月	1.2

表4を見ると、日本語教授経験が20年以上の母語話者Aが最も留学生との評定値の差が小さく、留学生の既知度／未知度を最も正しく予測できたことがわかる。母語話者Bよりもむしろ母語話者Cのほうが留学生の評定値との差が小さいという結果については、その差が0.2と小さいため、この二つのグループの違いが予測の精度に大きな影響を与えるものではなかったと考えるのが妥当であろう。すなわち、母語話者Aと母語話者Cの間の差が0.6であったことから、日本語教授経験の有無よりも教授経験の長さの方が未知語予測の精度に大きく影響したと考えられる。

次に、留学生が「意味を知らない」「意味を推測できない」と答えた割合が高い語がどのような語であったかを見ておく。表5は、留学生の評定値によって候補語を分類したものである。

表5：留学生の評定値による候補語の分類

留学生の平均評定値	候補語
1.0～2.9	アガサ・クリスティ、紡績、飛び杼、栈橋
3.0～3.9	しのぐ、まなざし、肺結核、名残、垂れ流し
4.0～4.9	皮切り、乱立する、過酷、膨れ上がる、劣悪、構内、遊歩道、幾度、綿織物、奴隷、疫病
5.0～5.9	上下水道、鉄道網、並行する、巨額、初頭、密室、出生登録、排煙、富、プラットホーム、日光浴、制約する、スモッグ
6.0～6.9	賃金、ターミナル駅、運賃、繁栄、革新、衰退、設ける

留学生の平均評定値が低い語、すなわち留学生が「知らない、意味を推測できない」と答えた語を見ると、一つには「産業革命」というテーマに限定された語か、あるいは少なくとも現代の日本社会から見て日常的ではない語という特徴があるように思われる。「紡績」「飛び杼」などは繊維業に特化した語であるし、「肺結核」「疫病」などは現代社会において日常的に見聞きする語ではないだろう。しかし、「まなざし」「名残」「垂れ流し」など日常的な文脈でも使われる語も評定値が比較的低いことや、逆に留学生の評定値が高い語にも「革新」「排煙」など日常的とは言い難い語が含まれていることから、日常的な語であるかどうかという感覚だけでは予測しにくいと言える。漢字表記からの類推が容易であれば評定値が高くなると考えられるし、「まなざし」は「視線」、「名残」は「影響」など、他の語で言い換え可能な場合は覚えにくいといった要因も影響していると考えられる。

以上のことから留学生にとって難しい語とは、専門語か日常語かといったように単純に特徴づけられるものではないことが本調査で確認できたと言える⁵⁾。

最後に、文章理解課題において語彙知識の不足の影響が見られた例について報告する。まず、課題1の空所補充問題はほぼ正確に答えられていたため、本調査の協力者である留学生は調査文の概要を捉えることができていた

と考えられる。そのうえで課題2の説明問題への回答において、語の知識の不足が文の正確な理解を妨げていると考えられる現象が見られた。

課題2では、文章中の指定された文について留学生に意味を説明させた。理解していても表現力不足でうまく言い換えられない場合があり、直接的に理解を測りにくい問題点もあるが、正確に言い換えようとした回答では理解できていない語が特定しやすい。

次の(1)の文を言い換えた(2)の回答を見てほしい。

- (1) ジョン・ケイが発明した飛び杼により、綿織物の生産性は急速に上がった。
- (2) 飛び杼が発明したから、綿織物の輸出入ができるため、生産性は急速に上がった。

表現に誤りがあるものの、この留学生が「飛び杼が発明されたために綿織物の輸出入ができるようになった」と考えていることがわかる。この留学生の「飛び杼」の評定値は「4」で、「知っている言葉だが、意味を完全に理解しているか自信がない」と回答している。「飛び杼」とは布を織る装置のことであるから、明らかな誤解である。

次に、(3)を言い換えた(4)(5)の回答を見られたい。

- (3) ブライトンの繁栄と衰退から近代観光の海水浴や日光浴が健康増進に効果があると医学的に証明され、ブライトンは温泉地バースをしのぐ人気の観光地となった。
- (4) 海水浴などから得られる健康な効果によって、ブライトンは温泉地バースの観光地になった。
- (5) ブライトンは温泉地バースに代わって爆発的人気のある観光地となった。

(4)の回答者は温泉地「バース」と「ブライトン」の関係を読み間違えて、「ブライトン」を「バース」の中に位置する観光地であると解釈している。(5)の回答者は「バースに代わって」と表現しているが、「に代わって」を間違って使っているか、あるいは「バースをしのぐ」が「バースを超え

る」意味であることを正確に捉えられていない可能性がある。(4)の回答者の「しのぐ」の評定値は「3」、(5)の回答者は「2」であった。

このように評定値4以下の語が実際に文章理解の妨げになっている例を見た⁶⁾。

本調査では留学生の主観的評価を基準として日本語母語話者の評価との一致度を測ったが、主観的評価が高くても実際には知識不足から正確な文章理解に至っていないケースもあり得る。ただ、少なくとも留学生が必要性を感じている語を評定値によって知ることができ、日本語教授経験が20年以上ある母語話者はそれを高い精度で予測することができることがわかった。

第四章 日本語教師による語彙学習支援のあり方についての考察

本稿では、専門日本語語彙学習において日本語教師の役割が過小評価されていることへの疑問を出発点として、日本語教師が担うべき語彙学習支援の可能性を考えてきた。すなわち、留学生が大学の授業で指定された教科書を読む際などに問題となる語を特定し、読解前に指導することで専門的な文章の理解を助けるという支援のあり方を検討するうえで、日本語教師による困難語予測に焦点を当てて調査を行った。

その結果から経験の豊かな日本語教師は留学生の困難語を高い精度で予測できることがわかり、そのような日本語教師が事前に語彙指導を行うことで効果的な支援ができることが示された。

本章では、まず経験の豊かな日本語教師はなぜ留学生の困難語を正しく予測できるのか、その要因について考察し、そのうえで日本語教師による困難語予測を具体的にどのように学習支援に活用し、どのような教育実践が可能か、教育への応用の方法を提案したい。そして、その学習支援のあり方が留学生自身が専門語リストを使って自主学習する場合や辞書を引ながら学習する場合と比べてどのように効果的かを考えたい。

4-1. ベテランの日本語教師はなぜ困難語を予測できるのか

本稿の調査で、20年以上の日本語教授経験を持つ人は日本語教授経験のない人や経験年数の浅い人に比べて最も正確に留学生の困難語を予測できたという結果が得られた。本稿では、困難語を予測するために何年の教授経験が必要かという問題には立ち入らないが、ここでは本調査で20年以上の教授経験を持つ母語話者のグループが高い精度で予測できたことに対する原因について本稿の見解を述べてみたい。本稿の調査だけでは原因を特定することはできないが、現時点で考えられる要因を挙げてみる。

まず、先行研究が指摘しているように、非母語話者との接触経験の多寡が影響しているという理由が考えられる。日本語を母語としない人と日本語でコミュニケーションをとる場合、日本語母語話者が日本語の語彙や文法、話すスピードなどを調節する傾向が見られ、そのような傾向は非母語話者との接触経験が多くなるほど強まることが一三三（1995）、村上（1997）、筒井（2008）などの研究で明らかにされている。したがって、非母語話者との接触経験が多ければ多いほど、日本語の語彙を調節する経験を重ねることになり、非母語話者が理解可能な語彙の範囲を把握しやすくなると考えられる。それに加えて日本語を教える立場にあれば、より意識的に学習者の日本語レベルに合わせて語彙を使い分けることに注力すると考えられる。特に日本国内で日本語を教える場合、日本語を使って日本語を教えるのが一般的であるため、日本語教師養成課程で語彙や文法のレベルを調節する技術が訓練されている。このような訓練と実践によって留学生に理解可能かどうかを予測する能力が鍛えられるのではないかと考えられる。

ただ、本稿の調査で日本語教授経験が浅いグループの結果がそれほど高い予測力を示さなかったことについてどう解釈したらよいかという問題が残る。困難語の予測能力を身に付けるのにどのくらいの経験年数が必要なのかという問題に答えるにはさらなる精緻な調査が必要であるが、現時点での私見を述べておく。あるテキストの中から留学生にとっての困難語を抽出する能力は、単なる教授能力というよりも教材開発能力に近い。つまり、既存の

テキストを使って指導する経験だけではなく、対象者のレベルに合わせた教材を自ら作成する経験によって培われる能力だと考えられる。そういう意味の教授経験の応用が可能になるまでには相当の経験の蓄積が必要になるということかもしれない。留学生の専門のテキストや論文を教材化するにはそれだけ高い専門性が必要となることは間違いないが、逆に言えばベテランの日本語教師の高い専門性を活かせば、単なる専門語リストの提供以上に留学生に対して効果的な学習支援が提供できると言える。

4-2. 日本語教師による困難語予測を語彙学習支援に活かす方法

それでは、日本語教師による困難語予測をどのように学習支援に活かしたらいいか、具体的な指導法を考えてみたい。そして、その指導法が語彙リストを使った留学生自身による自習と比べて優れている点について見解を述べる。

まず前提として、本稿では複数の留学生を対象とした集団指導を前提として指導法を提案する。これは大学での日本語教育の現状に鑑みて現実的であり、取り入れやすいと考えるからである。またその際に、留学生の専門分野が同一または近いことが条件となる。学部ごとのクラス設置が可能な場合にこの指導法が最も効果を発揮すると考えられる。たとえば亜細亜大学では、学部1年生は学部ごとに設置された日本語科目を必修科目として履修することになるため、その科目において各学部の専門に合わせた論文などを題材に用いて語彙指導を行うことができる。ここでは、国際関係学部の留学生を対象とした指導方法を例として示す。

国際関係学部の留学生にとって、国際問題に関する知識と語彙が修学に必須となるため、「NHK NEWS WEB」の国際ニュースの記事を題材とし、日本語教師が困難語の抽出を行う。留学生にニュース記事を読解させる前に、そのニュース記事について知っていることを話させ、背景知識を活性化するとともに、語彙学習の動機づけを行う。そして、そのニュースの概要をまとめながら、そのニュースの理解にとって重要な語について解説をする。たと

例えば「ロシアのウクライナ侵攻」のニュースであれば、「侵攻」「防衛」「停戦協議を重ねる」「NATO に加盟する」「中立を保つ」「NATO の勢力圏が迫る」「力で抑え込む」などの語を取り上げて、例文を示しながら意味を確認したり、理解を明確化したりする。その後ニュース記事の読解をさせ、内容把握問題で文章理解を確認する。語彙知識には当然個人差があるため、復習としてさらに自分自身でわからない語の意味を調べさせる。そして次の授業で語彙の小テストを行い、理解の定着を促す。以上のような指導法が考えられる。

上で述べた方法が、単に専門語のリストを与えて語彙学習をさせる場合や留学生自身が辞書を引きながら文章を読む場合とどう違うのか、どのように効果があるか、考えてみたい。

ある専門分野で使用頻度が高い語を特定してリスト化する研究が数多く発表されている（小宮・横田 2002、小宮 2005、野村・川村・斉木・金庭 2011、野村・川村 2011、中川・齊藤 2014、今村 2014、岩田 2014、水崎 2015、佐野 2016、小宮 2017、小宮 2018a、小宮 2018b、山元・稲田・品川 2020、など）が、それらが論文などの文章理解を促す効果を生むためには、文脈における使われ方を学ぶ必要がある。そこで、適切な例文を示すために専門家の協力が必須であり、門外漢の日本語教師には限界があると指摘されている（松下 2017）わけだが、既に指摘しているように文章理解の問題になる語が全てその分野の専門語であるわけではない。また、留学生がある専門的な文章を読もうとするときには、その文章に含まれている未知語について知りたいのであって、その分野の専門語リスト全体を知る必要はない。特に、学部1年生のようにその分野を学び始めたばかりの段階では、まずその分野の研究に触れ、興味を深めるために文章を読むという意味合いが強い。その段階での必要な援助は、文章理解を促すことであって、専門語リストを与えるだけでは不十分である。

では、留学生自身が辞書を引きながら文章を読めばよいのではないかという反論が考えられよう。しかし、人間の認知資源には限界があるため、読解

中に未知語の意味を調べたり、考えたりする作業が入ることによって、文章から読み取った情報の保持が困難になり、文章理解が低下することが指摘されている（弥永 2013）。読解前に理解の妨げになりそうな語を予め指導しておけば、文章理解がスムーズに行われるはずであり、事前に指導する語の量を最小限にできれば効率のよい学習支援ができると言える。したがって、留学生にとっての未知語をできるだけ正確に把握することが効果的な学習支援のために重要な要素となる。またさらに、既知語であっても文脈中の意味を誤解してしまう場合などがあり、留学生自身が意味を調べようとする語だけが問題となるわけではない。これらのことを考え併せると、日本語教師が支援する意義は大きいと言える。

本稿では、留学生が日本語で専門的な文章を読むための支援として、予め文章理解の妨げになりそうな語を特定し、読解前に指導する方法が効果的であるという立場に立ち、そのために日本語教師の経験が活かせると主張した。最後に、本稿の主張を効果的な教育実践に落とし込むために解決しなければならない課題について述べる。

第五章 まとめと今後の課題

留学生が大学での学修のために読まなければならない文章の量は膨大であり、特に、専門分野の学びを始めたばかりの段階では負担が大きいことが推察される。日本語教師による援助はこのような専門分野の導入段階で特に効果を発揮すると考えられる。そこで、実際に効果的な指導実践に結び付けるために、明らかにしなければならない研究課題について最後に述べる。

まず、専門分野による違いがあるかどうかについて検討する必要がある。本稿では、観光文化の歴史についての文章を取り上げて調査を行ったが、他の社会科学分野の文章でも同様の主張が可能か検討する必要がある。すなわち、文章の理解に必要な語の中で専門語の割合が高い文章であれば、日本語教師が学習者にとって困難な語を予測できたとしても、日本語教師による指

導が効果を発揮しにくいのではないかと考えられる。理解の妨げとなる語の中で一般語の割合がどの程度あるかはより精緻に調査する必要がある。

次に、留学生の既有知識による違いがないか検討する必要がある。文章のテーマに関する既有知識が文章理解の助けになることが考えられるため、今回の調査であれば、産業革命による社会の変化について留学生がどの程度知識を持っているかによって日本語教師による援助を必要とする度合いも変わってくると予想される。日本語では知らない語であっても、推測によって文章理解が可能になるだろう。

専門分野や文章のタイプによる違いや留学生の既有知識による違いを明らかにしたうえで、日本語教師による援助を必要とする対象者で、且つ効果的な援助が可能な文章を特定することができれば、本稿の成果を一般化して、専門日本語教育研究に資することができるだろう。

注

- 1) 「母語話者なら通常知っている語」であるかどうかは、筆者の主観的判断によるところが大きいが、調査で用いたテキスト『社会学がわかる辞典』で例として用いられていることから、想定される読者にとって自明であると判断されていると思われる。留学生の評定値が低かった「ヴィトン」「夏目漱石」などの語が母語話者にとってどこまで既知であるかは、別途調査によって確認されるべきである。
- 2) 文章理解課題は、この調査のために筆者が作成したものである。本調査の調査文の出典である『多文化時代の観光学—フィールドワークからのアプローチ』を指定テキストとする科目「観光文化総論」でも受講生に課題が課されているが、それとは異なるものである。
- 3) 『リーディングチュウ太』とは、東京国際大学の川村よし子氏と甲南大学の北村達也氏が共同開発された「チュウ太の道宝箱 (© 1997-2008 Kawamura Kitamura)」の語彙・漢字チェッカーの機能で、Web 上で無料公開されている。
- 4) 日本語教授経験のある母語話者の経験年数は、長い方から 33 年、30 年、28 年、26 年 10 か月、26 年 8 か月、25 年 7 か月、22 年 9 か月、21 年、20 年、16 年 5 か月、15 年、14 年 6 か月、13 年 8 か月、11 年、6 年 6 か月、2 年 6 か月であった。これらは調査協力者の自己申告による。
- 5) ただし、留学生自身の認識とは異なる場合があることを断っておきたい。筆

者の経験でも留学生に専門の勉強で何が難しいかを聞くと専門用語が難しいと答える人が多く、専門用語ではないが難しい語があるという答えは聞いたことがない。今回の調査でも「あなたが大学で専門の科目を勉強するとき、難しい点はどんなことですか？難しいと思うことすべてにチェックしてください（複数回答可）」という質問で、「専門用語が理解できない」にチェックした人が13名中9名と最も多かった。2番目に多かった「課題、テストが難しく、どのように答えたらいいかわからない」にチェックした人は13名中4名であった。

- 6) ここで示した例は、留学生が難しいと判断した語が実際に文章理解を妨げていることを示しているが、本調査で留学生や日本語教師の評定値が低かった語と文章理解との関係は別途検証する必要がある。すなわち、難しい語であるという主観的評価とその語が文章理解を妨げるかどうか、また、それを指導することによって文章理解が促されるかどうかは必ずしも一致するものではない。

【謝辞】

この研究を行うにあたり、亜細亜大学国際関係学部教授の高山陽子先生に情報提供をいただいた。高山先生のご担当科目の「観光文化総論」で実際に受講生に課している課題や留学生の回答を見せていただき、留学生の理解度などについて担当教員としての所感を教えていただいた。ここに記して、敬意と感謝の意を表したい。

参考文献

《和文文献》

- 今村和宏（2014）「社会科学系基礎文献における分野別語彙、共通語彙、学術共通語彙の特定一定量の基準と教育現場の視点の統合」『専門日本語教育研究』第16巻、pp.29-36.
- 弥永啓子（2013）「読解の授業における語彙指導—最新の第二言語語彙習得の実証研究に基づく考察—」『京都橘大学研究紀要』第39号、pp.162-145.
- 岩田一成（2014）「看護師国家試験対策と『やさしい日本語』」『日本語教育』158号、36-48.
- 加藤敬子（2017）「なぜ経済連携協定（EPA）看護師候補者たちは看護師国家試験で誤答を選んだのか：日本語教育からのアプローチ」『人間社会環境研究』第

33号、pp.31-46.

小竹直子 (2022)「大学学部留学生のための日本語語彙指導—日本語教師による学習困難語の予測に焦点を当てて—」『国際関係紀要』第31巻第2号、pp.163-197.

小宮千鶴子・横田淳子 (2002)「専門連語による専門語の自習教材の開発—経済分野を例に—」『日本語教育方法研究会誌』第9巻2号、pp.12-13.

小宮千鶴子 (2005)「日本語教育のための経済の専門連語—概論教科書と新聞の比較を中心に—」『早稲田日本語研究』第13号、pp.1~12.

小宮千鶴子 (2017)「理工系留学生のための数学の基礎的専門語」『日本語教育方法研究会誌』第23巻2号、pp.4-5.

小宮千鶴子 (2018a)「留学生のための化学の基礎的専門語」『専門日本語教育研究』第20巻、pp.43-48.

小宮千鶴子 (2018b)「留学生のための物理の基礎的専門語」『早稲田日本語研究』第27号、pp.37-48.

小森和子・三國純子・近藤安月子 (2004)「文章理解を促進する語彙知識の量的側面—既知語率の閾値検索の試み—」『日本語教育』第120号、pp.83-92.

佐野彩子 (2016)「企業の年次報告書を用いたビジネス分野の外来語に関する一考察—アカデミックジャパニーズ、白書、新聞語彙との比較を中心に—」『専門日本語教育研究』第18巻、pp.37-42.

張 瀟尹 (2022)「接触場面において接触経験の多い母語話者が行う意識的配慮の分析—日本語レベルの異なる非母語話者との会話を通して—」『一橋大学国際教育交流センター紀要』第4号、pp.27-39.

塚田泰彦 (1992)「文章理解と語彙知識—F.B.Davisの研究をめぐって—」『上越教育大学研究紀要』第11巻第2号、pp.167-181.

塚田泰彦 (1995)「文章理解過程における語彙指導の可能性」『国語科教育』第42号、pp.93-102.

筒井千絵 (2008)「フォリナー・トークの実際—非母語話者との接触度による言語調整ストラテジーの相違—」『一橋大学留学生センター紀要』第11号、pp.79-95.

中川健司・齊藤真美 (2014)「介護福祉士国家試験におけるカタカナ語の特徴」『専門日本語教育研究』第16巻、pp.73-78.

野田尚史 (2014)「上級日本語学習者が学術論文を読むときの方法と課題」『専門日本語教育研究』第16号、pp.9-14.

野村愛・川村よし子 (2011)「介護福祉士候補者の自律学習支援のための語彙リスト作成」『日本語教育方法研究会誌』第18巻1号、pp.14-15.

野村愛・川村よし子・斉木美紀・金庭久美子 (2011)「単語難易度と出題頻度に配慮した介護福祉士候補生のための語彙リスト作成」『日本語教育方法研究会誌』

第18巻2号、pp.12-13.

- 一二三朋子 (1995) 「母国語話者と非母国語話者との会話における母国語話者の意識的配慮の検討」『教育心理学研究』第43号第3巻、pp.277-288.
- 藤山智子 (2013) 「中国語を母語とする日本語学習者の語彙知識の深さと文章理解」『比較社会文化研究』第33号、pp.77-84.
- 梶田直美 (2015) 『接触場面における母語話者のコミュニケーション方略：情報やりとり方略の学習に着目して』ココ出版.
- 松下達彦 (2017) 「語彙リストの利用法—コーパス分析に基づく語彙研究は何を目指すべきか—」『専門日本語教育』第19号、pp.19-24.
- 水崎泰蔵 (2015) 「日商簿記検定試験3級出題文の漢字語彙—過去問から抽出した語彙の学習優先順位判定に関する考察—」『専門日本語教育研究』第17巻、pp.47-52.
- 村上かおり (1997) 「日本語母語話者の「意味交渉」に非母語話者との接触経験が及ぼす影響—母語話者と非母語話者とのインターアクションにおいて—」『世界の日本語教育』第7号、pp.137-155.
- 山元一晃・稲田朋晃・品川なぎさ (2020) 「日本語教育で扱うべき語の選定のための医学用語と一般語のはざまの語彙の分析」『日本語教育』第175号、pp.80-87. 《英文文献》
- Anderson, R.C. & Freebody, P. (1981) 'Vocabulary Knowledge', Guthrie, John T. Ed., "Comprehension and Teaching: Research Reviews", pp.77-117.
- Carver, Donald P. (1994) 'Percentage of Unknown Vocabulary Words in Text as a Function of the Relative Difficulty of the Text: Implications for Instruction', "Journal of Reading Behavior", Vol.26, No.4, pp.413-437.
- Ferguson, C. (1981) 'Foreigner Talk' as the Name of a Simplified Register', "International Journal of the Sociology of Language", Vol.28, pp.9-18.
- Hirsh, D., & Nation, P. (1992) 'What Vocabulary Size is Needed to Read Unsimplified Texts for Pleasure?' "Reading in a Foreign Language", Vol.8, No.2, pp.689-696.
- Hu, M. & Nation, P. (2000) 'Unknown Vocabulary Density and Reading Comprehension', "Reading in Foreign Language", Vol.13, No.1, pp.403-430.

資料①：調査文の一部

産業革命

産業革命とは技術の革新が社会全体を変えたことである。かつて手で動かしていたものを機械で動かすことができるようになったことで、生産量が急速に向上した。そして、A.大量生産は大量消費を生み出した。それまで主に農業を行っていた人々は、町の工場で働く資金労働者になった。町に人が集まり、大きな都市が形成されていった。

こうして作られた最初の工業都市がイギリスのマンチェスターであった[図1.1]。もともとマンチェスターにはリバプールの商人たちが作った工場があった。17世紀から18世紀にかけて奴隷貿易で巨額の富を得たリバプールの商人たちは工場を作った。綿織物の需要が高まり、インドから輸入するだけでは不足したことから、彼らはアメリカ大陸から綿花を輸入し、リバプールの近くのマンチェスターで綿織物の生産をはじめた。B.ジョン・ケイが発明した飛び杼により、綿織物の生産性は急速に上がったものの、今度は綿糸が不足してしまった。そこで、ジェームズ・ハークリーブスが発明したジェニー紡績機(1776年)が登場した。こうして工場制手工業(マニュファクチュア)から工場制機械工業へ移行し、綿織物の大量生産が可能になった。マンチェスターとリバプールの間には鉄道が敷かれ、工場で生産された綿織物は蒸気機関車でリバプールに運ばれ、世界各地へ輸出されたのだった。

資料②：文章理解課題1

【課題1】

産業革命が人々の生活や社会にどのような変化をもたらしたかについてまとめた下の文章の下線部に本文中から適切な言葉を入れなさい。

産業革命によって、①_____が可能となり、生産量が急速に向上した。それまで農業を行っていた人々は、工場のある都市に移り住み、②_____となった。そして、町に人口が集中した。工場からの排煙によって③_____が起こった。また、工場で生産されたものを港に運ぶために④_____が敷かれ、やがて、イギリス中に鉄道網が広がった。鉄道会社が乱立し、大体の運賃割引旅行を始める会社もあった。以前から人気のあった海浜リゾートは、海水浴や日光浴の健康増進効果が医学的に証明されると、人々が集まり、⑤_____としてにぎわった。

資料③：文章理解課題 2

【課題 2】

文章中の A、B、C、D、E を自分の言葉で説明し直しなさい。意味がわからない部分が含まれていた
ら、わかるところだけでも説明しなさい。

A. 大量生産は大量消費を生み出した

B. ジョン・ケイが発明した飛び杼により、綿織物の生産性は急速に上がった

C. 「霧のロンドン」で有名なスモッグの問題は、1956 年の「大気清浄法 (Clean Air Act)」に
おいて家庭用煙突の使用が禁止されるまで続いた

D. これによって児童労働が制約されたものの、実際には 1837 年まで出生登録が義務づけられて
いなかったため、多くの工場主は子供を働かせることが可能であった

E. 観光研究の古典とされるジョン・アリーの『観光のまなざし—現代社会におけるレジャーと旅
行』においても、ブライトンの繁栄と衰退から近代観光の海水浴や日光浴が健康増進に効果がある
と医学的に証明され、ブライトンは温泉地パースをしのぐ人気の観光地となった

Technical Japanese Vocabulary Learning Support for International Undergraduate Students —Focusing on Difficult Word Prediction by Japanese Teachers—

Naoko KOTAKE

This study aimed to explore methods for Japanese language teachers to effectively support international undergraduate students' study of technical Japanese language learning. Regarding existing research on technical Japanese language education, several attempts have been made to identify and list frequently appearing words in specialized texts in a specified field. However, both the lack of knowledge of technical words that hinder understanding when reading technical Japanese texts as well as common words that native speakers are familiar with can become a problem. Therefore, if Japanese teachers can identify the words that international students do not know the meaning of, or words that are difficult to understand in a specialized text, it can be concluded that Japanese teachers can provide effective vocabulary learning support.

We conducted a survey asking both native speakers with experience and without experience in teaching Japanese to predict words that appear in the supplied text that may be difficult for international students. Following this, the degree of matching of words judged difficult by international students was compared, and the results indicated that the group with more than 20 years of teaching experience matched with the highest accuracy.

This suggests that experienced Japanese teachers can easily identify difficult words for international students and contribute to effective vocabulary instruction.